



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究(1)
Author(s)	大爺, 栄一
Citation	北海道大學 經濟學研究, 15, 75-109
Issue Date	1959
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/31058
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_P75-109.pdf



戦後の西ドイツにおける人口の 国内移動の研究 (1)

大 爺 栄 一

A 西ドイツの新しい行政区域に関する考察

は し が き

第二次大戦後の西ドイツは、戦前と全く異なつた地域区分による連邦共和国となつたので、人口の移動問題を考察する予備的作業として、各州の成立過程とその性格に関して略述することとした。

I 占領下における諸州と連邦共和国の成立

一九四五年五月八日のドイツ国防軍の無条件降伏、それに続く代行国家首席デーニッツ提督のアメリカ軍による逮捕と政府機関のイギリス軍による接收によつて、ドイツには中央政府は存在しなくなつた。これに続いて連合国は、ドイツのすべての行政管理権をその手中に収める旨の宣言を六月五日に発表した。同時に戦争末期において暫定的にとりきめられていた、各国による占領地域の確定が行われ、ベルリンは四国の共同占領下におかれ、全占領地域に

関する連合国管理理事会の設置が決定された。七月から八月にわたつては、ドイツに許容さるべき将来の経済水準と賠償に関する極めて厳しい諸決定が行われた。²⁾

しかし、あらゆる固有の行政機構を拒否されていたこの敗戦直後の混乱の中から、まず町村(Gemeinde)の段階において、続いてより高い段階へと、住民による自治の機運が生れて来た。占領各地区において種々異なつた形をとりはしたが、占領軍との対立、あるいは協力の複雑な過程を辿りながら、それは西ドイツ各地域における新しい地方政府の樹立の基礎をきずいた。一方、連合国側においても侵略的軍国的ドイツ政權の破壊はその目的であつたが、ドイツ国自身の抹殺はその企図するところでなかつた。従つて暗憚たる破滅の中において、後の西ドイツ連邦の基盤となつた諸州(Länder)の形成は意外に速に行われたのであつた。

この自治の復活と州の形成で先頭に立つたのはアメリカ地区であつて、一九四五年九月に、軍政部布告によつて旧ライヒ内の構成国家を中心として、バイエルン、ヴュルテンベルク・バーデン、ヘッセンの三州がまず創設された。翌年早々から、まず町村議會、続いて市議會の選挙が行われ、同年後半には制憲會議による州憲法が承認され、州議會が召集されて、占領軍の所管下にはあるが、州の範圍における立法と行政の活動が復活したのである。

アメリカ占領地区が、ほとんど旧プロイセン領を含まず、戦争による被害も相対的に輕微であつた為、自治權恢復が容易であつたのに対して、北部のイギリス占領地区では諸事情はより困難であつた。ハンブルクを除いてはすべて旧プロイセンの諸州で、その中央集權的支配の下に立ち、戦災による破壊と生産低下は最も甚だしく、しかも占領軍の態度はより嚴格で、町村の段階においてすら、あらゆる政治的活動に強度の干渉が行われた。

しかしながらアメリカ地区における情勢の伸展とも関連し、特に四六年四月におけるプロイセン国家の永久解体の決定は、従来のプロイセン各州を基礎とし、小諸國をこれに合体する形での新しい独立州の建設へと導いた。四六年

後半におけるシュレースヴィヒ・ホルシュタイン、ニーダーザクセン、ノルトライン・ヴェストファーレンの形成がこれであり、ハンブルクはふたたびラントの地位を獲得した。しかしながら、アメリカ地区と異なつて、第一期の州議會は占領軍の任命にかかるものであり、各州の憲法の制定も、連邦共和国の成立以前には、不急として保留されてゐた。

フランス占領地区においては同様に四十六年中期にラインラント・ファルツ、バーデン、ヴェルテンベルク・ホーエンツォラーンの三州が生れた。この地区での特色は、制憲會議における州憲法草案が人民投票に附されたことであり、進展過程はアメリカ地区ほどには急速でなかつたが、イギリス地区よりは自由であつた。三国占領地区において、地域の自治組織がこの様に整備されつつある間に、西方諸国とソ連邦との戦後の關係は急速に悪化し、一九四七年末のロンドン外相會議において、ドイツとの統一平和條約に関する東西間の交渉は決裂し、全ドイツ統一の実現は無期棚上げの結果となつた。一方、西ドイツの分割占領は、各地域の復興を著しく阻害し、特にイギリスはその負担に苦しんでゐた。占領地区内に恒久的な政治基盤の確立を期待してゐたフランスを除いて、イギリスとアメリカとは、まずその占領地区間の經濟障壁を撤廃し、ついに四十八年初期、両占領地域の完全な一体化が實現した。

英米占領地区の統合は西ドイツ統一の契機となり、四十八年六月ロンドンにおいて、西方六カ国は「自由で民主的な基礎のもとに、ドイツ人民に、ドイツ再統一の可能性を与える」ことを宣言した。四十八年夏から制憲會議の作業が開始され、翌四十九年五月に新規本法は五十三票對十二票で可決され、占領軍の承認を受けた。同時にライン河畔の大学都市ボンが連邦臨時首都と決定された。同年八月連邦議會の選挙が行われ、九月には Th・ホイス博士と K・アーデナウアー博士が連邦大統領と連邦首相とに選ばれてドイツ連邦共和国は占領下に出発した。

一方、敗戦による工場、輸送機關、都市の破壊、領土の縮少、東方からの難民の流入によつて全く破滅状態に陥つ

ていた生産と経済は、占領国の救済とドイツ国民の努力によつて徐々に恢復し、四八年のマーシャル援助の開始と通貨改革の成功は、その本格的再出発の基礎となつた。特に五〇年以降の發展は驚異的で、遂には、賠償による工場設備の撤去や、避難民の大量流入等の、平常ならば悪条件に数えられるものまでが、生産拡大に寄与するまでに至り、フランスはもとよりイギリスをも凌駕して西欧第一の生産と繁栄を生むに至つた。しかもこれと平行する西方対東方の緊張関係は、西方陣営内での西ドイツの地位を急速に高める結果となつた。一九五一年に西方諸国はドイツとの戦争状態の終了を宣言し、一九五四年にはパリ、ロンドン条約が調印され、一九五五年五月五日、占領は正式に終了して、ドイツ連邦共和国は、戦前領域の二分の一を支配するだけではあるが、完全な主権国家の地位を恢復した。敗戦による崩壊後十年目である。

- (1) 附表を参照。現実の占領はテューリンゲンが米軍によつて占領されるなど、協定地域と一致していなかつたので、その後協定地域内への移動が行われた。
- (2) 政府財産、工場施設及び生産物(石炭等)による賠償は相当厳格に実施されたが、経済水準の規制はその後の情勢変化により結局、最終的には全部制限解除になつた。その第一歩は一九四七年五月のアチソン米國務長官の「ヨーロッパの工場としてのドイツ」再建の演説である。
- (3) 従つて各州における憲法制定の完了は、ジュレースヴィヒ・ホルシュタイン 一九四九年からハンブルク 一九五二年の間に行われた。
- (4) 一九四七年五月のラインラント・ファルツの投票結果は賛成五七九〇〇二、反対五一四三三八 (Statesman's Year Book)。
- (5) 例えば、一九四六年二月にフランスはルアー地域の国際化とラインラント恒久占領を提案してゐる。
- (6) この統合計画には、州代表者会議、高級裁判所、中央銀行の設置等が含まれていた (Deutschland heute, S. 30)。
- (7) イギリス、フランス、アメリカ、ベルギー、オランダ、リユクサンブル。
- (8) 制憲会議の正式召集は四八年九月一日、会議議長は K. アーデナウアー博士 (Deutschland heute, S. 33)。
- (9) 選挙結果は四〇二議席中 CDU/CSU 一三九、SPD 一三一、FDP 五二、その他八〇。

II 各州の地域的・経済的構造

以下各州の地域的・経済的な性格について考察したいが、その観点は、各州の経済、産業に関するものよりも、むしろドイツの地域的分析において一つの重要な観点となつている。地域の再編成の面にウェイトをおきたい。

地域の再編成と呼んだのは、第一次大戦から第二次大戦の間においては *Reichsreform* となづけられ、第二次大戦後は *Territoriale Neugliederung* と称せられている事項で、ドイツ国家の合理的な再編成をめざす諸種の研究および運動、特に地域の合理化をめざすものである。

中世末期以降、長く政治的末統一のままであつたドイツは、十九世紀の六七十年代、ヴィルヘルム一世とビスマルクの下にはじめて近代の統一を完成したが、その統一は種々の面でイギリス、フランス等に比して後れた点を持つていた。プロイセン以下二十数国の王国、公国の集合^①で、各国はそれぞれ内治に関する独立権を保有し、その上に皇帝と連邦宰相が存在するという構成は、封建的制度の残存的要素を持つてゐる。しかも面積、人口、経済においてプロイセンが圧倒的優位を占め、残余の王公国の過半は、自立に必要な条件をほとんど満たしていない小国^②であることが複雑さを一層増していた。一九世紀後半以来のドイツの経済的發展は、政治的境界を無視していくつかの新しい経済的な統一地域を作りだしていたが、旧来の地域的編成は單にそれを阻害する作用を及ぼすのみのことが多かった^③。

第一次大戦後、ヴァイマル共和制の発足にあつて、この点に関して根本的な改革を試みる最初のチャンスがおよとされた。フーゴー・プロイスの憲法草案は、面積人口において大体均等な（人口の最小標準百万人）十六の自由国（*Länder*）の結合による連邦を目ざしていた。しかし、これは必然にプロイセン国家の解消を前提としていたので、主としてプロイセンの反対により、更に変更をうける多くの当時の地方政府の反対により、実現を見なかつた^④。この最

初の重要な時機を失した領域再編成は、その後現実問題としてはプログラムには上り得なかつたが、いわゆるライヒスレフォルムに関する多くの文献と運動を生む契機はあたえられたのである。

ヴァイマル共和制下におけるこの種の運動で、ある段階以上の重要性を持つたのは、第一に一九二八年に連邦政府によつて召集された、各州の閣僚代表による会議である。この会議の結論は、プロイセンは解体してその州を単位とし、各州は人口、面積のバランスをとるごとく相互に調整し、二十一の *Länder* を形成することを推奨した。同じく一九二八年に元連邦首相 H・ルッター⁽⁶⁾は *Bund der Erneuerung des Reichs* を結成し、プロイセン、ザクセン、バイエルン、バーデン、ヴュルテンベルクの五大国を中心に、その他の諸州を吸収する案を提出した。これは前者に比べればより現実的な案と呼べるが、しかし中央集権的色彩が強いものである。⁽⁷⁾

より研究的な面では、極めて多くの文献を、ライヒスレフォルムに関する政治組織研究的なものと地域的研究とに二大別できる。後者の中では更にドイツ全体に関する研究と、むしろ純粹に地域の経済、文化地理的な特殊研究とがある。全体に関する研究では、代表的なものとして比較的小地域(二二)を目ざしたシヨイ⁽⁸⁾、大地域(一一)を結論したオプスト⁽¹⁰⁾その他があり、戦争中から戦後にかけて、アメリカのドイツ地理研究の第一人者ディッキンソン⁽¹¹⁾はこの問題に非常な関心を示した。

地域再編成に関する論文は、それぞれ異つた極めて多くの視点に立つてゐるが、大別すると文化的、人種的要素を中心の基準におくものと、資源、生産、交通等を中心におくものとあり、また既存の行政区画をできるだけ利用しようとするものと、それに全くとられないものがある。経済的要素が重視されるのはライヒスレフォルムの出発点からして当然であるが、人種(*Stämme*)的要素がかなり強調されているのは、大体一〇——一世紀間に成立した種族および言語境界⁽¹²⁾が、今日でも根本的には維持され、しかも、それぞれの相違に関する意識が強いドイツにおける特殊

的事情として理解し得るのである。

ナーツィ・レジームのもとにおいて領域再編成はある程度の進歩を示した。中央集権の下にプロイセンの独自の発言力が著しく減少したことはこの運動を容易にした。ハンブルク、メークレンブルク等⁽¹³⁾に関しては調整の結果、相当の改善が行われた。しかし従来のある提案の基礎的前提、すなわち自立能力と自主性を持った諸州の連邦的結合はナーツィの統治観念には適合しなかつた。NSDAPの管区(Gau)は、むしろ細分されて、中央指令に直結し得る地方組織の形をとつていた。⁽¹⁴⁾ ナーツィ・レジーム下の地域調整が概して部分的なもので、しかも主に初期に限られているのはその為であると考えられる。戦争中には応急の必要に迫られてか、二、三の変更が行われたが、根本的といえるものではなかつた。

戦後のドイツ連邦共和国は、その根本精神において、まさしく一九一九年以來の理想の実現である。プロイセンの解体と、各州間の相互調整によつて、自立能力と一体性を持つ Länder が形成されて、これが Bundesrepublik の基礎となつてゐる。しかも、新しい州国家の形成が、その後における連邦の結成を予期してはいても、それは既定前提ではなかつたので、経済的自立性を欠くとき弱小な州の群立が避けられたのは幸運であつた。

しかし、占領中、しかも比較的短期間に急速に形成された各州は、経済的、人種的な合理性の基準よりも、歴史的な行政区分を重視している。明瞭に不合理であると思われる境界も、ほとんどすべての場合修正されずに存続している、根本的再調整の立場からすると、なお多くの問題が各所に残されている。

しかも、連邦成立後六十年間、三国による占領はなお継続していたので、占領地区相互にまたがる調整は極めて困難であつた。わずかに一九五一—五二年のいわゆる Südstaat (Baden-Württemberg) に関する再調整が成功しただけである。独立後といえども、国際間の緊張が極めて激化している為に、重要ではあつても、ある程度延期できる

この種の国内問題は棚上げに近い状態にある。従つて *Territoriale Neugliederung* に関するドイツ連邦基本法二十九条の規定によつて、一九五八年までに提出あるいは解決された問題は、すべて極めて局地的な調整⁽¹⁷⁾⁽¹⁸⁾に関するものを中心である。主権恢復後の状態にそなえて一九五五年に発表されたルッター委員会の報告も、あまり大きな具体的結果を生んではない。

この間にしかし連邦内の新しい各州においては、それぞれの新しい伝統と郷土意識が生れつつある情勢であり、従つて根本的な問題の再検討は、将来東ドイツを含める統一乃至平和条約の実現の時期まで延引されながら、西ドイツ内部においては現状が維持されるものと予想して大きな誤りはないであろう。

諸研究中の地域的調整に関する重要な観点を整理すると概略以下の様である。

A 面積、人口 (1. 面積、2. 形態、行政中心との関係、3. 人口数、4. 人口分布及び密度)

B 経済的条件 (1. 同質性、2. 多様性と相補性、3. 河川利用、4. 交通関係)

C 歴史的文化的条件 (1. 歴史、一体性、2. *Stamm* と *Mundart*⁽¹⁹⁾、3. 宗教)

D 総合的地域性 (一体性と、中・小地域への細分)

標準の *Land* の大きさは面積三・五—四・〇万平方キロ、人口四五百万人以上で、大体工業化の相当進んだプロイセンの一州くらいが想定されていたが、戦後の人口増加で、人口は六百万人程度を標準と考へて良い⁽²⁰⁾。

(1) 一八七一年のドイツ帝国は二十五の王国・公国・都市国家と帝国直属領のエルザス・ロートリンゲンの結合であつた。一九二〇年以降この数は十八に減少した [*Meyers Lexikon* 7. Auf. Band 3]。

(2) 両大戦間の一九二五年の数字ではプロイセンは、全ドイツに対し面積で六二%、人口で六〇%を占める。

(3) 同じ一九二五年に連邦一八国のうち、面積で一万平方キロに達しないもの一一、人口で一〇〇万に達しないもの一〇である。最小のシャウンブルク・リッペは面積三四〇平方キロ、人口四・九万で、府県の郡と比較してもより小さい。

- (4) ルーア、中央ドイツ、ライン・マイン等の工業地帯において最も甚しかった (G. von Geldern-Crispendorf : Die Deutsche Industriegebiete).
- (5) ただ、一九二〇年に実現したテューリンゲン地方の七つの旧公国の合併による新しいテューリンゲン州の成立は、その直接の結果と見られる。なお以下本文中に旧王国または旧公国として記されている場合は、すべて第一次大戦前の状態をさすので、一次大戦後はすべてフライシユタートまたはフォルクスシユタートと呼ばれた。
- (6) ルツターは第二次大戦後には四二名からなる領域に関する調査委員会の議長となった。
- (7) テューリンゲン、メークレンブルク、ヘッセン、ハンブルク、ブレーメンはすべてプロイセンに吸収されることになる。
- (8) Behrmann と Maull のライン・マイン地域の研究、Brüning のニーダーザクセンに的する研究、Hübener の中央ドイツに関するものなどを代表としてあげ得る。Dickinson の著書には詳細な文献目録がある。
- (9) E. Scheu : Die wirt.-geogr. Gliederung Deutschlands, in "Erde und Wirtschaft" S. 7 ff. ただしシヨイの二二の地域は再び九つの大地域に統合される。
- (10) E. Obst : Zur Neugliederung des Deutschen Reichs, Z. f. Geopolitik, 1928 S. 21 ff.
- (11) R. Dickinson : Regions of Germany 1945 および Germany, General and Regional Geography, 1953.
- (12) ザクセンおよびフランケン王朝 (九一九—一二五) 下の諸公領の境界は今日の言語境界と良く合致する。Meyers Lexikon 7 Auf. Band 3.
- (13) ハンブルクに関しては、その項で述べる。メークレンブルク・シュトレーリッツとメークレンブルク・シュヴエリーンは一九三四年に合同して新しいメークレンブルク州を作った。
- (14) 全ドイツは三二の管区に分れた。今日のバイエルンは五つに、プロイセンのラインプロヴァインツは四つに分けられた。
- (15) 一九四四年におけるプロヴァインツ ザクセンとプロヴァインツ ヘッセン・ナッサウの分割。
- (16) 連邦議会上院 (Bundesrat) は各州の代表 (州議会任命) によって構成され、人口六〇〇万以上の州は五名、二〇〇万以下の州は三名、一般には四名を代表として送る。従つて如何に大きな州でも、小州二州の反対には敗れるのである (Deutschland heute, S. 75 ff.)。
- (17) この法律の規定によつて一九五六年に実施された予備的人民投票については次節の註20および59を参照。

戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究 大爺

- (18) フランス占領地区に編入され、従つて当初ヴェルテンベルク・ホーエンツォラーン州に属していた、リンダウ地区のバイエルンへの復帰など。
- (19) ルッター委員会は、ノルトライン・ヴェストファーレンとラインラント・ファルツに関する問題点の検討に主力を注いだ。
- (20) Stamm を本文中において、人種と訳した場合が多い。厳密にはもちろん正確であつて、Rasse とは別概念であり、英語でいう stock または tribe である。ただこの論中ではこう訳することによつて甚しい誤解は生じないと考えたので、氏族または部族等の訳語を避けた。Stamm の分布は一般に Mundart (方言) の使用範囲とはば一致すると理解されている。本稿における Mundart の分類は Dr. E. A. Doube (Meyers Lexikon 8 Aufl.) に従つた。
- (21) Hübener の一論文 (Z. f. G. 1931) では Mitteleutschland の経済的統一性を強調しながらも、その面積五六・〇〇〇平方キロ、人口一一〇〇万人は一行政単位として過大であると論ずることく、過小と同時に過大を警戒する例が多い。

シュレースヴィヒ・ホルシュタイン (Schleswig-Holstein)

シュレースヴィヒ・ホルシュタイン州は英占領地区内に形成された州の一つで、連邦一〇州中最北の位置を占める。その区域は一九三九年におけるプロイセンのプロヴィンツ シュレースヴィヒ・ホルシュタインと厳密に一致する。歴史的には古くから一公国として存立し、一九世紀に至つて、プロイセン、デンマーク二国間の勢力圏拡大をめぐる紛争の渦中にまきこまれ、一八六四年の戦争の結果プロイセンに帰属したのである。東に連なる旧メークレンブルク、南にエルベ河をへたてる旧ハノーヴァーと、歴史的関連を持たず、ハンブルク、リュノーベックの二ハンザ都市とも沿革的には別個の存在であつた。元来のニーダーザクセン人の居住区域であり、完全なプロテスタントの地域である。農業的には、コッペル・ヴィルトシャフトと呼ばれる特色のある酪農地帯であり、鉱業を欠き、見るべき工業を持たない。⁽³⁾

連邦の構成州としてのシュレースヴィヒ・ホルシュタインは、その同質性においては疑なく最上位を占める。しか

し、面積、人口、経済的自立性の標準によつて判断すると、面積、人口において想定された標準規模の二分の一に達せず、経済においてはあまりにも農業に偏し、しかも巨大な隣接都市ハンブルクの支配力を強くうけている。州の首都キールは、行政と教育との中心としての意義を持つが、経済中心としての地位をハンブルクと争うことは不可能である。

ナーツィ・ドイツの崩壊に際して、軍事的にポケット地帯となつたこの州には、多くの軍隊と避難民が流入し、農村の人口吸収力と相俟つて、西ドイツ諸州中最大の人口膨脹を示した。工業地帯の復興と共にこれらの急増人口は次第に再流出しつつあるが、しかもなお、平均の個人所得、担税力等⁽⁵⁾において、諸州中で最も低い水準にある。

シュレーズヴィヒ・ホルシュタインの今後の連邦内における地位としては、(a)現状存続、(b)ハンブルクとの合邦、(c)ニーダーザクセンとの合邦の三つが考えられる。(c)は経済的、文化的には同質性が大きいが、歴史的には一体化されたことなく、しかもハンブルクをエンクラーフェとして残すことになり、また面積、人口ともに標準よりかなり大きくなる。(b)ハンブルクとの結合は戦前のあらゆる提案に共通であり、これによつて特に財政面における救済を期待できるが、人口においてはほぼ等しく、面積と経済機能において全く異なる二者の一体としての運営は必ずしも合理性を有するものと考えられない。従つて、自立能力において著しく欠ける弱点を包蔵しつつも(a)現状の存続が一応予期されるのである。

ハンブルク(Hamburg)およびブレーメン(Bremen)

両都市はいずれも、ハンザ都市同盟の有力な構成分子であり、他の諸都市が次第に没落し、ナーツィ・レジームのもとで、リューベックもまた独立を失つた後⁽⁶⁾も、なお形式的にせよ、都市国家としての独立性を維持し來つた。ただ

し独立の実質は大幅に失われ、反面その代償として、ハンブルクはナーツィ・レジームの領域調整計画によつて、その周囲のプロイセン所屬のアルトナ以下の諸地域を併合して都市自身としては、ほぼ理想的な行政区域の拡張をなしたのである。⁽⁹⁾

第二次大戦後、この両都市を含む地帯は英連邦軍の占領下におかれたのであつたが、ブレーメンとその外港のブレーマーハーフェンは、南部の米軍占領地帯への補給港として、島状に孤立した米軍地区とされた。⁽¹⁰⁾ 西欧占領地帯内におけるラントの形成に際し、ハンブルクはその戦前の領域をもつて、ブレーメンは、米軍の占領区域をもつて、それぞれ独立の都市国家たるの地位を恢復した。⁽¹¹⁾ ブレーメンの新しい区域は、戦前に比すると、多少の拡大を見せ、特にブレーメン市自体の区域が、エルベ河右岸で下流に伸長されたことと、外港ブレーマーハーフェンの背面に接続していたプロイセンのヴェーザーミューンデがブレーメンに吸収されたことは、将来の発展にとつて大きなプラスである。

ハンブルクおよびブレーメンの二都市国家は、その自立の経済的基盤においてはもつとも恵まれている。ヨーロッパ大陸の最大港の一つであるハンブルクは、戦後従前のヒンターランドであつたベルリン、ザクセン工業地帯およびチエコスロヴァキアとの結合を断たれて苦境に陥つたが、西ドイツ経済の復興と共に、その巨大な港湾施設と造船工業はふたたび完全に利用されるに至つてゐる。また西ドイツの工業中心地帯に対しては陸運、内陸水運ともにハンブルクより恵まれた位置にあるブレーメンは、戦前の水準をはるかに凌ぐ港湾活動によつて繁栄を続けている。⁽¹²⁾

この二都市は同時に周辺の農業地帯に対しても地域的中心となつており、従つてニーダーザクセンまたはシュレースヴィヒ・ホルシュタインとのそれぞれの統一は、広域的地域編成の上から当然考えられることである。しかしながら両都市の根本の経済機能が、共に全ドイツの生産に対する輸出入の門戸であつて、ローカルな周辺との結合関係は、はるかに副次的なものであること、長い独立都市国家としての歴史的伝統を有することを考量すれば、連邦内におけ

る現在の地位は維持されるべきであろう。

ただ両都市が共に内陸港で、その河口までの両岸が連邦内の他の州に所属していることは港湾の運営上、支障となる場合があり、従つてエルベおよびヴェーザーの両岸はそれぞれハンブルクとブレーメンに編入させるべきであるとの見解も生れている。⁽¹³⁾

ニーダーザクセン (Niedersachsen)

ニーダーザクセン州は、プロイセンのプロヴィンツ ハノーヴァーとブラウンシュヴァイク、オルデンブルク、シヤウンブルク・リッペの三旧公国を合して形成された。その中核は明瞭に嘗てのハノーヴァー王国であるプロヴィンツ ハノーヴァーであり、選ばれた首都は旧王国首府のハノーヴァー市である。しかしながら、低ドイツにおけるザクセン人の古い居住地帯を包括するこの新しい州には、行政的名称として従来一度も使用されなかつたが、地域名としては広く慣用されていたニーダーザクセンが名称として採用された。

ニーダーザクセンの面積、人口は、それぞれ前節に述べた標準に最も良く合致している。経済的観点からは、農業を基盤とはしているが、相当に発達し、多様性を持った工業をも持ち、かなり釣合のとれた発展が見られる。文化的にも大体一様であり、さらに州全体が、政治、経済、学術の中心としての首都ハノーヴァーを焦点として結合している。

従つて全体として評価するならば、ニーダーザクセンは、もつとも安定性のある構成を有すると見ることができ。しかし、よりディテールにわたつて検討すれば、(a)ハンブルクおよびブレーメンとの関係、(b)RBオスナブリュックを中心とする西部縁辺部の異質性、(c)ミンデン・ビーレフェルト地区をめぐるノルトライン・ヴェストファーレ

ンとの関係、(d)吸収された諸公国の問題など、不安定要素と考えられるものが存在する。

(a)に的しては、リユーネブルクからクックスハーフェンまでのエルベ左岸は、ハノーヴァーの一部としての歴史的発展にもかかわらず、現在ではハンブルクの最も密接な影響圏内にあり、エルベ河の水路維持とも関連して、何等かの具体的措置、少なくとも能率的なコオペレーションが必要とされている。プレーメンに関しては、それが連邦内最小でしかも二つに分れたエンクラーフエを形成していること、ヴェーザー河の水路に関して、ハンブルクの場合以上に問題が大きいこと、プレーメンの背後の農村地帯は歴史的、経済的にこれと一体になつて発展してきたことなど、多くの問題が生れてきている。

(b)について、元来ハノーヴァー王国は、エルベ、ヴェーザーの間でリユーネブルクおよびブラウンシュヴァイク領を主軸として形成されたものであり、一九世紀初頭以来ミュンスター、オスナブリュック教会領や東フリースラントを獲得して著しく西に伸びたが、オルデンブルク公国の介在によつて、その接続はほとんど絶たれ、歴史的にも文化的にも強い異質性を留めていた。ニーダーザクセン州の成立によつて、地域の連続性は著しく向上したが、オルデンブルク南半をも含める西部地域は、(1)文化的には、ニーダーザクセンの残余の地帯と異なつて、カトリック地域であり、(2)農業生産が強くルーア工業地帯の市場を指向し、(3)交通条件も、ヴェストファーレンのミュンスター⁽¹⁸⁾ひいてはルーア地帯と結びついていることなどの点で、南方ヴェストファーレンとの連帯性を強く示している。

これに対するニーダーザクセンとしての結合力は、(1)一八一五年以来ハノーヴァーの旗の下に結ばれていたこと、(2)経済的に見て、ヴェストファーレンとの関係は相補的であるが、ニーダーザクセンは同質性を主張し得ること、を考へることができる。

(c)のミンデン＝ビーレフェルト地区の問題は、次項で考察するが、これは多くの点で(d)と対照的に本来ニーダーザ

クセンのラウムに属する地域が他州の領域内にあると考えられるのである。

(d) オルデンブルク、シャウンブルク・リッペンなどの旧公国が、独立の地位を恢復しようとの運動は現実問題としては、重視されるほどの基盤を持ちえない⁽²⁰⁾。それぞれの面積、人口、および地域的なニーダーザクセンとの包含関係によつてこのことはほぼ自明である。しかしながらニーダーザクセン州内での行政区分において、旧ブラウンシュヴァイクとオルデンブルク領に対してはレギールングスベツイルクと異なつて、フエアヴァルトウングスベツイルクという名称が与えられていることは、歴史的特性を名目的にせよ生かそうとの考慮であると思われる。

ノルトライン・ヴェストファーレン(Nordrhein-Westfalen)

ライン河流域において、イギリスとフランスの占領地区の境界が、アイフェルとヴェスタールトの両山地の麓にひかれたため、プロイセンのラインプロヴィンツは南北に二分され、RBコーブレントツとRBトリアーはフランス地区に、人口の大半を占めたケルン、アーヘン、デュッセルドルフの三つのRBはイギリス地区に編入された。この北半部にプロヴィンツ ヴェストファーレンを合せ、さらにリッペ旧公国を含めたものを以て、面積においては十州中四位であるが、人口と生産力において断然他州を圧倒する、英占領地区内の最後の州、ノルトライン、ヴェストファーレンがデュッセルドルフ⁽²¹⁾を首都として生れた。

同じくラインの下流域に存在し、同じく一九世紀初頭以来プロイセンの領有に帰しても、ラインラントとヴェストファーレンは行政的に結合された歴史を持たなかつたし、カトリック地帯としての共通性は存しても、言語⁽²²⁾および歴史的文化的点では相当の相違を示していた。しかしこの両者を分ち難く一体化したのは、一九世紀中葉以降、ルーアの豊富な石炭資源を基礎として躍進した重工業で、ラインプロヴィンツとヴェストファーレンの境界にまたがつて、

大規模な工業地帯を形成し、巨大な人口の集中を生んだ。

従つて、ライン・ヴェストファーレン工業地帯の行政的統一は、二〇世紀初頭以来の地域再編成の中心課題の一つであつたが、その実現は敗戦の結果として生れたのである。

ライン河畔のデュースブルクからヴェストファーレンのドルトムントまで、ヘルヴェーク上の旧商業都市の線上に重工業の中心線が存在する。石炭鉱業の中心は北方にこれと平行して、リッペ、エムシャー両河の間を走る。⁽²⁵⁾ 南方ザウアーラントの山岳地帯に同じくやや東西にゾーリングゲン以下の金属完成品製造の都市が連なつてゐる。⁽²⁷⁾ この石炭と鉄を基礎とする地域を西方から南方へ包む様に、ライン左岸からザウアーラントのウッパタールに至る繊維工業の地帯が存在する。⁽²⁸⁾

ライン・ヴェストファーレン工業地帯の人口と生産の集中は、上の地域を中心とするが、更にこれとやや間隔をおいて、アーヘン、ケルン、ビーレフェルト等の、それぞれ特色ある消費財生産的な色彩の強い工業地帯が、より外方に分布する。

鉱工業はもとよりこの州の支配的産業であるが、農業においても、中心と外縁の工業地帯の間隙を埋めるように、ライン左岸、ヘルヴェーク、ミュンスターラント等の生産力の高い商業的農業の地域が生れてゐる。

ノルトライン・ヴェストファーレン州はその新しい誕生にも拘らず、豊かな生産と、カトリックの優勢な影響下に
ある大きな都市的人口を持ち、更にすべての活動が州の中央部に集中し、人口密度の低い、自然条件の点からも境界的な地帯を以て他州と境している点で、最も効果的な行政地域の形成の例と見られる。

しかしながら、この場合にもまた、全然問題が存しないのではない。その一はノルトライン・ヴェストファーレンへの過度の生産と人口の集中であり、その二は若干の縁辺部の帰属問題である。

(2) 第一の点では、一州で西ドイツ全体の三〇％に達し、隣接のベルギー、オランダ等と比較しても、これをはるかに凌ぐ一五〇〇万の人口の集中と、更にそれ以上の工業生産および経済力の集中は、連邦国家内における各州間の均衡の点から見て、望ましいとはいえず、副次的には、過度の大きさは州内行政の点でも障害があると見られる。しかしながら、州の中心であるライン・ヴェストファーレン工業地帯の行政的統一を破壊することは全く非現実的であるので、(1)ライン左岸地区の、ラインラント・ファルツ州またはその一部との結合が、後節に述べるラインラント・ファルツの不安定性と関連して考慮され、(2)更により二次的な地域再編成として、ヴェストファーレンの東部、北部と、ニーダーザクセンの西部をもつてする、大ヴェストファーレン地域の形成が考量される。すべてのノルトライン・ヴェストファーレンに対する計画は、ルーア工業地帯とその直接の周辺地域を包含して、最小の自足性を有する地域を設定し得るか、更にこれから切り離された地域が、他の諸地域と共に統一性を持った新行政地域を再形成できるか、の二点を重要な批判点として持つが、現在のノルトライン・ヴェストファーレンの持つ高度のインテグリティを以て判断すると、いかなる大規模な再編成にも大きな困難が存在し、従つて、他州との不均衡の問題を伴ないながらも実現可能な具体的対案は見出し難いものではあるまいか。

(b) 個々の縁辺部に関してはしかし事情が異なる。州の北境ラインネ附近および南端ズイーゲン周辺に、個々のケースとして興味ある問題が存するが、より大きな対象としては州の東北部のミンデン、ラーフェンスベルク、リッペを中心とする地域が存在する。現在RBデトモルトとして統一されているこの地域は、古いプロイセン領のラーフェンスベルク伯領、ミンデン公領と二次大戦前まで独立の旧リッペ公国とからなり、ニーダーザクセンとヴェストファーレンとの間に独自の緊密な一地域を形成している。歴史的、言語的にはヴェストファーレンとより強く結び、経済的には繊維工業を主として何れとも独立の一地域であり、宗教的にはニーダーザクセンと等しくプロテスタント地区で

ある。形態的にはヴェストファーレンのニーダーザクセン領内への大きな突出となつてゐる。総合すると複雑なボーダーラインケースである。戦後の再編成に際して、歴史的所屬關係によつてノルトライン・ヴェストファーレンに属したこの地域は、しかしその後の数次の選挙等においては、常にニーダーザクセンの動きと平行的な動きを見せてゐるのである。⁽³⁷⁾

ヘッセン(Hessen)

ヘッセンは、プロイセンのプロヴィンツ ヘッセン・ナッサウと旧ヘッセン公国とが、それぞれのうちフランス占領地区に編入された小部分を除き、アメリカ軍占領地区内における新しい州として生れたものである。ラインフランケン人の居住地帯であり、宗教的にはほとんどプロテスタント地域である。

プロヴィンツ ヘッセン・ナッサウの主要部を占めていたクーパーヘッセン(ヘッセン＝カッセル)の地域はもともとヘッセン公国(ヘッセン＝ダルムシュタット)と密接な關係にあつた。したがつて歴史的、文化的に一体性が強く、加えて、ヘッセン鞍部を通ずる南北の大交通線上に、交通・商業の大中心地フランクフルトを全地域の焦点として持つてゐる。しかも従前は極めて人為的な不自然な境界によつて相互に区分されていたので、統合によるこの新しい州の形成は最も自然に行われたものの一つである。⁽³⁸⁾しかし戦前の行政境界は、いまでも、RBダルムシュタットが二つの団地に切り離され、その間に楔状にRBヴィースバーデンが突出して、ここにフランクフルト市が含まれてゐるなどの不自然さを残してゐる。

連邦の構成単位としてのヘッセンに関する問題点は、それが中に含んでゐる不均質性よりも、西南部ドイツにおける地域編成という点から見て、それが十分な広がりを持つてゐない点に存する。

(a) ヘッセンの面積、人口が標準規模にやや及ばないこと。

(b) 隣接する他州内に本質的にはヘッセン地域に属する部分が残されていること。

(c) メトロポリスとしてのフランクフルトの影響力が今日の州境をこえて大きく広がっていること。

この三点に問題は所在する。最後のものから考察すれば、中世における帝国皇帝の即位都市であり、古い文化的伝統を有し、現在、連邦銀行の所在地⁽⁹⁾、空陸における交通の中心地⁽¹⁰⁾として、西ドイツの経済首都ともみなされるフランクフルトの金融的、商業的活動は、ヘッセンの全域のみならず、ラインラント・ファルツの大部分、バーデン・ヴュルテンベルクとバイエルンの一部から、ザールラントまでをその圏内におさめ、従つてその経済活動の範囲を中心に考慮するならば、オープストの結論に近い、極めて大きな一地域の統合が望ましいことになる。⁽¹¹⁾

(b) しかし、かかる根本的再検討を採用しないとしても、ラインラント・ファルツのメインツ、バイエルンのアシヤフエンブルク等は、大フランクフルト圏内における衛星都市的存在である。バーデン・ヴュルテンベルクのマンハイム、ハイデルベルク地区やバイエルンのヴュルツブルク地区などは、それぞれ強度の独立性を持つていて、結論はより複雑であるが、強い索引力をフランクフルトおよびヘッセンからうけていることは否定できない。

バーデン・ヴュルテンベルクおよびバイエルンとの境界に関しては、現状の変更は可能性が小であるし、面積、人口における不足にも拘らず、ヘッセンの経済力そのものは、容易に自立を維持し得るので、次項に論ずるラインラント・ファルツの将来の問題を除いては、ヘッセン自身に的しては可能性のある問題点は少ないと見るべきである。⁽¹²⁾

ラインラント・ファルツ (Rheinland-Pfalz)

ラインラント・ファルツは、フランス占領地区内に形成された諸州のうち、現在まで、その存在を維持している唯

一の州であるが、しかもなお根本的な種々の不安定要素を包蔵している点で、今日の連邦諸州内での特異な例といえよう。

ラインラント・ファルツは、面積、人口において、連邦内では下位を占めるにすぎないが、しかも、その構成は最も寄せ木の色彩が強い。北半をノルトライン・ヴェストファーレンに割いたプロイセンのラインプロヴィンツの南半、主体はヘッセンに含まれている旧ヘッセン公国のうちライン河左岸部のいわゆるラインヘッセン、パイエルンのエクスクラーフェであつたファルツの三つの部分の結合が州の主体で、それに更にプロイセンのプロヴィンツ ヘッセン・ナッサウからライン右岸でラーン河下流地区に四つのクライスが加えられている。

歴史的に異なつた経過をもつ四つの地域の、しかも主体はすべて他州に属するものの残片の接合であるので、これをもつて一つの新しい独立的な構成体を組織するのには当然困難があつたわけであるが、一九四五、四六年の米英地区における自治州形成にフランスとしても後れるわけには行かず、その占領地域の北半に、この全く新しい州が形成され、以後その育成に尽力したのである。⁴³

この州の統一体としての発展にとつて、有利な条件は必ずしも少なくはない。地域的にはライン左岸のいわゆるラインラントを中核として、まとまり良く、その人口中心に近く、伝統ある宗教、商業都市マインツを首都として持つている。文化的にはカトリックのフランケン人の地帯である。⁴⁴ 産業は小農民的な農業を基盤として、一二の大化学工業を持つ。⁴⁶ 歴史的に統一されたことはないが、相当強い同質性を持った地域と考えられるのである。

しかしながら、一方、その自立の維持にとつて、いくつかの難点がある。

(a) 第一に、全西ドイツの見地にとつて、その大動脈たるライン河が、この州の成立によつてカールスルーエからビンゲンまで国内での境界となつてしまい、多くの不便が惹起されている。

(b) 個々の例として、特にマイン河合流点、ネカー河合流点の問題があり、しかもそれぞれの地点におけるラインラント・ファルツ側の都市は、首都マインツと最大の都市ルードヴィヒスハーフェン⁽⁴⁸⁾であつて、従つて簡単な地域変更的解決が困難である。

(c) 経済的にラインラント・ファルツは低位に位し⁽⁴⁹⁾、金融、卸売商業等では州外に依存している。

(d) 以上の種々の弱体性に基づいて、もともと歴史的に一体でなかつた各構成地域が、それぞれの母体に再び結びつこうとの傾向が潜在する。

ラインラント・ファルツの最終的地位の問題は、ルッター報告によつても、その合理的調整を期待しているのみで具体的な結論を出してはいない。また政治的には最も安定した地域の一つとなつているこの州の今までの一体化に向つての発展を無視することも、現在の状態では望ましくないであろう。しかし再調整の可能性について検討を試みることはできる。その可能性には、

(1) ラインラント・ファルツ州を分割せずに^(1a)ヘッセンまたは^(1b)ザールラントと合体する。^(1c)あるいは三者の合体(オープスト試案、ただし必ずしも合理的でない)。

(2) 州を解体して、それぞれの構成地域を、その歴史的連関の深い州と結合せる。この場合、ラインヘッセンについては問題ないが、コブレンツおよびトリアーは、ノルトライン・ヴェストファーレンの分割問題と深く関連してゐる。ファルツは旧バイエルン領で、ザールラントとの関係もあり、必ずしも一義的な結論は見出せない。⁽⁵³⁾

バーデン・ヴュルテンベルク(Baden-Württemberg)

バーデン・ヴュルテンベルク州の成立は、占領地区の分割に際しての偶然的事情が、領域の再編成に対して好結果

をもたらしただけとして論ぜられよう。バーデンおよびヴュルテンベルクは、南西ドイツにおける二国で、それぞれヴィーン会議以来今日の領域を占めている。両国は共に南北に長く、東西に相ならんで、しかも全体としてはまとまりの良い形態であるに拘らず、両者相互の境界は出入多く錯雑していたので、従来のほとんどあらゆる計画においてその合同は要請されていた。しかし長い歴史的独立と、共に自立を可能ならしめるだけの面積と人口を持っていたので、両国が別々の占領地区に属するか、或いは共に一国の占領下に入つた場合でも、合邦は困難であつたと思われる。

然るにドイツ敗戦後この二国において、占領地域は次のごとく定められた。すなわち、ヴュルテンベルクの東隣バイエルンを占領地区とした米軍は、北方ヘッセン地方の占領地区との連絡にバーデン北部を通過するアウトバーンの確保を必要とし、一方、オーストリア西部のフォアアルベルク州のフランス軍はバーデンのフランス軍との連絡にヴュルテンベルク南部とバイエルンのリンダウ地区を通過する必要があつた。⁽⁵⁴⁾ 従つて、ヴュルテンベルクとバーデンの間を南北に引かれるのがより常識的であるはずであつた占領境界は、両国を貫いて東西に引かれる形となり、その北部が米軍、南部がフランス軍の所管下に入つたのである。

占領地区内における州の形成に當つて、フランス地区では、両国の旧来の対立は解消せず、バーデンとヴュルテンベルク・ホーエンツォラーンの二州が、⁽⁵⁵⁾ それぞれの戦前領域の南半を占めて誕生した。しかし、アメリカ地区では旧ヴュルテンベルクと旧バーデンは合同して、ヴュルテンベルク・バーデン州が新しく成立した。この結合の実現には両州の北部が、工業化の程度が高く、しかもヴュルテンベルクの機械工業地帯への交通がバーデンを門戸としていて一体化が進んでいたことと、⁽⁵⁷⁾ 北バーデンが新しい一州としては面積が狭小にすぎない事情とが働いたのである。⁽⁵⁸⁾

従つて一九四六年以後、旧バーデン国およびヴュルテンベルク国の区域には、工業化されたヴュルテンベルク・バーデン、農業的なヴュルテンベルク・ホーエンツォラーンおよびバーデンの三州が、⁽⁵⁹⁾ 前者はアメリカ軍地区、後二者

はフランス軍地区として存在し、連邦共和国の成立に際しては、そのままの形でこれに参加した。

しかし、この分割はあらゆる点で不自然であり、特にフランス地区二州の存続は、その経済的基礎においても薄弱であつたので、一九五一年に至つて、三州を一つの新州に結合する運動が各州における人民投票に問われることになつた。十二月の投票結果は、ヴュルテンベルク、バーデン、それぞれ南北に分つた四地区中、三地区で合併賛成多数バーデン南部で反対がわずかに賛成をしのいだけで、翌一九五二年にバーデン・ヴュルテンベルク州は発足した。

バーデン・ヴュルテンベルクは、その面積、人口において標準規模に最も良く合致している。工業は消費財工業を中心に最も高度に発展し、⁽⁶²⁾西ドイツ第二の工業州であるが、ノルトライン・ヴェストファーレンの如き、連邦内での畸形的優越には達していない。農業、林業も集約的に経営されている。⁽⁶³⁾経済的基礎は十分に確立している。

歴史的には一体化した過去を持たず、宗教的には首都シュトゥットガルトを中心とする人口集中地帯はプロテスタント、外縁の農村地帯はカトリックである。人種的にはシュヴァーベン人が中心であるが、北部に相当広くフランク人の地域を含む。異質関係は、諸地域間よりも、むしろ工業地帯と農村地帯との間に見られるが、その関係はライン・ヴェストファーレン的な対立関係に比しては相互依存的な面を多く示すのが一つの特徴である。⁽⁶⁴⁾

バーデン・ヴュルテンベルクの自立的基礎は現実には極めて強固であり、領域の範囲、州の規模も共に妥当であるので、その限りではこれ以上の推論を要しないが、潜在的に存在する問題点としては、

(a) 同一の人種・言語系統に属するバイエルン領シュヴァーベンの問題。

(b) 人種的にフランクンのであり、ニュルンベルク、ヴュルツブルクの影響圏内にある州東北部のホーエンローエ地区の問題がある。⁽⁶⁵⁾しかし共に今日の歴史的事情のもとでは現実化する可能性はない。かえつて

(c) ライン左岸で、他州に属するが、特に経済的に関係の密接なフアルツ、ザールラントとの関係が、これら諸地

域の将来と関連して将来に課題を残しているといえよう。また、

(d) 南部バーデン地区における分離的傾向も、⁽⁶⁶⁾経済的基盤を持ち得ないし、統合後の日時の経過と共に、消滅する傾向をたどっている。

バイエルン (Bayern)

バイエルンはドイツチェスライヒの統一内において、プロイセンに次ぐ最大の国家であつた。歴史的、文化的にもプロイセンによつて代表される北ドイツ的のものとは相容れぬところが多く、従つてビスマルクによるライヒの形成以来、絶えず地方分権主義の代表者であり、時には分離主義的傾向をすら示した。⁽⁶⁷⁾敗戦によるライヒの崩壊後、バイエルンに最初に自治州としての独立の動きが起つたのは必然性を有していたのである。バイエルンはその主要部分は一括してアメリカの占領区域となつたので、以前の国の領域のままで新しい州となることが可能であつた。これはハンブルクとブレーメンを除くと、広い地域を占める州としては唯一の例である。ただしライン左岸に飛地となつていたバイエルン領フアルツは、フランス占領地区に編入されたため、バイエルンと切り離され、新しいラインラント・フアルツ州の形成に當つて、これに包含された。

今日のバイエルンの領域は、ヴィーン会議後ウィッテルスバハ王朝の統治下に結びつけられ來つた地域で、従つて強い歴史的一体性を持つてゐる。しかし、その地域構成は、かなり強い人種的、文化的、経済的の相違を示すいくつかの地域の複合からなつていて、必ずしも統一的不是ではない。ニーダーザクセン、ヘッセン等と比較すると、むしろ構成諸地域間の対照は大きいといわねばならぬ。

ドーナウ河以南のオーバーバイエルン、ニーダーバイエルンとチェコ国境に沿うオーバーフアルツは、中世以來の

バイエルン王国の旧領、いわゆるアルトバイエルンで、バイエルン人、カトリック、農業的である。⁽⁶⁸⁾しかし、ドーナウ以北にオストフランケン人の居住集中地帯があり、特に伝統を誇る帝国直屬都市ニュルンベルクを中心として、プロテスタントで完成財工業⁽⁶⁹⁾の發展したフランケン地域が、アルトバイエルンと対照的な性格を示す。マイン河の下流のマインフランケン地域は、自然環境においては温和なライン流域に類似するが、⁽⁷⁰⁾宗教と産業の面ではかえってドーナウ以南に近いものがある。アルトバイエルンの西にはレヒ河を境界としてシュヴァーベン人の地域があり、言語の点ではバーデン・ヴュルテンベルクの延長地帯であり、地形、産業、宗教の面ではアルトバイエルンからこの地域を通じてヴュルテンベルクのオーバーシュヴァーベンまで連続的な一様性を持つ。⁽⁷¹⁾

ファルツの分離以後でも、バイエルンの面積は七万平方キロをこえ、人口密度は連邦諸州内では低位であるが、総数は九百万をこえるので、州の標準規模よりはずれもはるかに高い。これを是正するための試みとして、

(a) 最も容易なものは、ドーナウ河以北のフランケン地域の独立であり、人種、宗教、産業、中心城市の關係から見ると高度の妥当性を持つている。⁽⁷²⁾これに対する反対の論拠としては、

(1) 交通条件の変化に伴ない、今日ではバイエルンの領域といえども、過大ではない。⁽⁷³⁾

(2) 全体として農業的で、工業化の低いバイエルンの経済は、分離によつてうける財政的打撃が大きい。⁽⁷⁴⁾

(3) 一八世紀までの歴史は別として、⁽⁷⁵⁾一九世紀初頭來百数十年の統一としての歴史を持つ、等があげられ、實際問題としては、各州間の勢力關係、特にノルトライン・ヴェストファーレンとの對抗關係もあつて、連邦内で面積第一人口第二の大州を分割する動きは現れていない。

(b) 個々の地域的調整の問題に転ずると、ヴェルツブルクを中心とするマインフランケン、アウグスブルク以西のシュヴァーベン、共にまとまつた性格を持つた中地域で、それぞれバイエルンとヘッセン、バイエルンとヴュルテ

ンベルクの移行地帯的な色彩が強い。前者の場合は、自然条件と距離関係が、後者の場合は人種、言語が、他州からの索引力となつているが、他面バイエルンとの共通性は、歴史的韌帯以外にも相当強いものがあり、州領域に関してステータス・クオが原則である現状では大きな変化は予期されない。ただ、アシャフエンブルクやノイ・ウルムなどのより局地的な問題に関しては、現実的な調整が望ましいと考えられる。

ザールラント(Saarland)

モーゼル河の支流ザール河流域の石炭鉱業と製鉄業の中心地帯は、フランス国境に隣接しているために、第一次大戦後と同じく、第二次大戦後にもフランスの占領管理するところとなつた。フランスとしてはロレーンの鉄鉱生産との関係もあり、この地域をその勢力圏内に確保するために非常な努力を払つたが、人口が全くドイツ人によつて占められるため、予期した効果を生まなかつた。一九五五年末の選挙結果が直接の誘因となり、一九五七年以来ザールラントは西ドイツ連邦の第十番目の構成州として復帰している。

ザールラントの区域は、元来の第一次大戦後のそれよりも、第二次戦後に幾分拡張されたが、依然として狭少で、工業地帯とその直接の周辺を含むにすぎない。人口一人当りの石炭採掘量、鋼鉄生産量ではノルトライン・ヴェストファーレンをすら凌ぐので、経済的自立の基礎は十分である。面積、人口共に小さいので、より広域的な基礎での再編成が考慮される時には、地方中心としてのヘッセン、フランクフルトの方向か、生産物の需要を通じての経済的結びつき、マンハイム・バーデン・ヴュルテンベルクか、或いはラインラント的解決か、多くの線が想定されるが、一九五九年にはじめて実現する西ドイツとの経済的統合の問題もあり、準都市国家的性格を持つ地域としての存続に近い将来大きな変動は起らないであらう。⁽⁸⁰⁾

(1) リューベックは一九三九年四月以来シュレースヴィヒ・ホルシュタインに編入された。

(2) 人種学的に見るとドイツ国内でもつとも北方人種的要素の強い地域である。

(3) 工業の中ではキールのホーヴアルツヴェルケによつて代表される造船業と、酪農加工業のみが顕著である。前者の従業員数はハンブルクに次いで第二位。

(4) 西ドイツ各州中もつとも農家の経営面積の大きい州で、平均面積一戸当り二一ヘクタール、連邦の平均一一ヘクタールの二倍である(一九五〇年)。

(5) 一九五六年において、州民一人当り州税、町村税負担額三二〇ドイツマルクで、諸州中最低である。同年における連邦の平均は五三八DM、Stat. Jahrbuch für Bundesrepublik Deutschland 1956 S. 375. なお、註の統計数字で特記なき場合はすべてこの統計書からの引用である。

(6) 註(1)参照。

(7) この合併は一九三七年に実現した。アルトナの語源は *All zu nah* であり、ハンブルクの郊外として出発したが、合併当時は人口三〇万で多くの官庁を持つ大都会であつた。エルベ南岸のハールブルク・ヴィルヘルムスブルクの合併は特に港湾と工業の発展上有利であつた。合同の条件として、旧ハンブルク国家の領域であつたいくつかのエクスクラフエを手放したにも拘らず、ハンブルクの面積は四一六平方キロから七四六平方キロに増加した(H. Phug: Deutschland, S. 406 ff.)

(8) ブレーメンがアメリカ軍の補給基地となつたのには二つの理由がある。一は、外港ブレーマーハーフェンが、西ドイツ諸港中最大の水深を持つこと。一は米棉および煙草の輸入港として発展したブレーメンは、アメリカと歴史的関係が深かつたことである。ブレーメンの戦後の独立はアメリカ軍占領区域内でも南部の三州よりはおくれた。面積、人口があまりにも小さいこと(いずれも連邦内最小)が、ニーダーザクセンとの関係を微妙にしたため。

(9) 戦前ではエクスクラフエになつていたフエーゲザックをこえて、ファルゲまでを含み、港湾施設の拡大に有利となつた。なお上流でヘーミングゲンも編入された。

(10) 戦前のブレーマンハーフェンの区域はわずか九平方キロ、現在は八〇平方キロである。

(11) 一九三六年のハンブルクの貿易量は二、二五〇万トン、一九五七年には二、六六〇万トン、ブレーメン(ブレーマーハーフェンを含んで)は一九三六年に六八〇万トン、一九五七年に一、四九〇万トンである。なお一人当り担税力において一九五六年、ハン

戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究 大爺

ブルクは九九四DM、ブレーメンは八〇七DMで、連邦中一、二位を占める。

(13) Dickinson: Germany p. 281 ff.

(14) ハノーヴァーのプロイセンへの統合は一八六六年。

(15) ライン河下流のやや東から、エルベ河までの低地のディアレクトは、一般にニーダーザクセン語と総括されるが、その西部を特にヴェストファーレン語の地域として東部のオストファーレン語および北ニーダーザクセン語と区別する場合もある。

(16) 地域的には、山麓の植土地帯、東部の砂土のハイデの地帯、河川沿岸の湿地、西部の泥炭地地帯に大別され、甜菜・小麦経営(植土)、酪農地帯(湿地)、豚飼育の地帯(西部)等がある。面積は中規模で平均一四ヘクタール。

(17) 消費財工業が主で、ゴム(ハノーヴァー)、自動車(フォルクスヴァーゲンヴェルケ、ヴォルフスブルク)、酪農製品等が著名であるが、ナーツィ・レジーム下に着手されたザルツギッターの製鉄業は再び復活しつつある。

(18) 中世時代にはブレーメンは司教区の所在地として、その周囲の政治的中心であつた。

(19) 鉄道の路線網においても、また、ドルトムント・エムス・カナル、キュステン・カナルを動脈とする内陸水路においてもこれが見られる。

(20) 一九五六年にオルデンブルクとシャウンブルク・リッペにおいて人民投票が行われたが、旧地位の恢復に対する賛成はそれぞれ一三および一五パーセントにすぎなかつた。経済的に最も高度化している旧ブラウウンシュヴァイク領については、その歴史的、経済的なハノーヴァー領との一体的発展の故に、分離運動は存在しない。

(21) RBはRegierungsbezirkの略。

(22) 一九五六年(ザール復帰以前)には西ドイツの石炭生産の九九%、褐炭生産の八六%、鋼塊生産の八四%を占める。

(23) ライン下流域の伝統的中心都市は、ローマの植民都市であり、ハンザのメンバー、大司教区の所在地としてのケルンであつた。

しかし一九世紀後半以来、旧ベルク公国の首府であつたデュッセルドルフが、ルーアの中心地帯により近接している位置を利して急速に発展した。大戦によるケルンの甚だしい被害(建築破壊率七五%はドイツの大都市中最高)と、デュッセルドルフの州首都選定は両者の関係をほとんど逆転させた。今日デュッセルドルフはフランクフルトとならんで、西ドイツにおける経済と金融の大中心の一つである。両都市の人口、ケルン一九三三年七五・七万、一九五七年七二・八万、デュッセルドルフ一九三三年四九・九万、一九五七年六六・八万(J. Gottmann: Europe p. 394 ff.)。

- (24) ラインラントはニーダーフランケン語およびケルン附近のリプアール語 (Ripuarisch)、ヴェストファーレンはニーダーザクセン語 (E. A. Doubek)。
- (25) Hellweg はライン河畔からエルベ河までの山麓を貫く中世の交通路。
- (26) 周知の如くルーア炭田の露頭は元来南方ルーア河沿岸に存在し、採掘はより北方に、深度を増しつつ行われている。二次大戦後においては、採掘はポットローパーレクリングハウゼンの線をこえて北進し、マール (Marl) の人口増加が著しい。
- (27) この地帯は一八世紀まで、南方の鉄鉱石と水力と木炭を利用する製鉄業の中心であつた。各都市はそれぞれの特産物を持っている。イーザーローンの針製造、ゾーリンゲンの刃物等。生産は大規模化しつつあるが、しかもなおルーアの中心部と対比すると中小企業的な色彩が強い (von Geldern-Crispendorf)。
- (28) ライン左岸では、アーヘンの羊毛製品 (古い原料指向の残存)、グラートバハーライトの棉花製品、クレーフエルトの絹製品が重要で、後二者は大工業的である。ザッパータルはより高級品を特徴とする。
- (29) アーヘン、金属製品。ケルン、諸種の消費財。ビーレフェルト、亜麻製品 ミシン 自転車。
- (30) 一九五六年の州税および町村税収入 (連邦税を含めた全税収の約六〇%に当る) において、ノルトライン・ヴェストファーレンは全連邦の三四%を占める。一人当たりも都市国家を除いては最高である。
- (31) 一九五五年におけるルッター委員会の報告である。
- (32) その必要がすでに一九二〇年に、ルーア地帯の約五〇〇〇平方キロの水利用、建築、交通を統一的に規制するルーアズイードルングスフェアバント (Ruhrsiedlungsverband) を創設させた。一九三六年のライヒの二十三のプランニング・リージョンへの分割に際して、この地域は一単位として認められた。ただし NSDAP のガウ組織ではルーア地域は、デュッセルドルフ、エッセン、南ヴェストファーレン、北ヴェストファーレン等に細分された。
- (33) この場合、技術的難点はデュッセルドルフおよびデュースブルク附近のライン左岸での境界線設定にあるが、根本問題は左岸地域のルーアからの分離が、はたしてプラスになるかどうかであり、左岸地帯自身にとつては否定的要素の方がはるかに大きいのであるまいか。
- (34) この計画への一つのプラスは、古い行政と地方文化の中心としてのミュンスター市の存在である。
- (35) エムス流域の交通焦点としてのライネを、そのヒンターラントから切り離している現状は不合理、しかし全体としてこの地域は

戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究 大爺

ヴェストファーレンとニーダーザクセンの移行地帯で、関連要素複雑。

(36) ザイーゲンを中心とする鉄鉱地帯は、言語と生活文化ではヘッセンに、一九世紀の歴史と、経済関係ではヴェストファーレンに、河川と交通関係ではラインラントにそれぞれ牽引されている (Pfug S. 132 ff.)

(37) 西ドイツの政治においてノルトライン・ヴェストファーレンはCDUの、ニーダーザクセンはSPDの、それぞれ牙城的存在であることは周知の事実である。然るにヴェストファーレンの東北の突出部はSPD常に優勢の区域である。前項のニーダーザクセンの西端部が常にCDUの勝利を占めるのと対比して示唆的である。

(38) 州の首都にはフランクフルトでなく、旧ナッサウ公国の首府であつた近接のザイースバーデンがえらばれた。なおフランクフルトは一九四七、四八年のバイゾニア時代には英米占領地区の首都的存在であり、連邦共和国の成立に際しては仮首都をボンと争つて敗れたが、今日でもルーアを背景とするデュッセルドルフを凌いで西ドイツの経済の最大中心である。

(39) フランクフルトに所在するその他の重要経済機関として、連邦鉄道本部、重要な証券取引所、ドイツチェスバンク、AEG本社、ファルプヴェルケヘクスト等がある。

(40) ライン・マイン空港は発着機数においても乗降客数(一九五七年全西ドイツの三二%)においても第一位。

(41) E. Obst: Zur Neugliederung des Deutschen Reichs, Z. f. G. 1928 S. 34 ff.

(42) ヘッセンに関する地域の問題としては、この他に北端のカッセル附近が、ニーダーザクセン南部のゲティンゲンと共に一地域を構成し、むしろ北方からの牽引力が強いと見られる (Obst, Dickinson) ことがあるが、重要度の高い問題ではない。

(43) ブレーメンを例外とすると、大学を持たぬ唯一の州であつたので、マインツに大学(戦後の新設は西ドイツでこれ一つだけ)を再興したのはその一例である。

(44) ただしモーゼル流域のモーゼルフランケン語と南部のラインフランケン語は多少相違する。またラインヘッセンとファルツはラインラントほどには徹底的なカトリック地域ではない。

(45) 平均経営面積七・七ヘクタールで最小である。集約なぶどう栽培は重要であり、全西ドイツの栽培の七〇%はこの州に集中する。靴工業も局地的に重要である。

(47) マインツはヘッセンの首都ザイースバーデンとライン河をはさんで地域的に接続し(ザイースバーデンの中心部は河畔ではないが)、ライン河が占領境界となつたため、本来マインツ市に属していた右岸のカステルとアマーネンベルクがザイースバーデ

ンに編入されることき事態を生んでいる。また前述したごとくマインツはフランクフルトの経済圏における一衛星都市なのである (Gotmann)。

(48) ルードヴィヒスハーフェンと対岸バーデンのマンハイム (人口その二倍) は代表的な姉妹都市であつて、ルードヴィヒスハーフェンに存在する大化学工業が対岸の州名を冠してバーディッシュ・アニリン・ソーダと呼ばれるのは一例証である。

(49) 一人当担税額はシュレースヴィヒ・ホルシュタインに次いで低位、三六六DM。

(50) カトリック小農民的なこの州は終始一貫CDUの最も強固な地盤である。従つて逆にSPDの強いプロテスタント的なヘッセンとの結合には、双方に政治的困難があることになる。

(51) ラインラント・ファルフの一体化の成功は一九五六年の住民投票で、現状変更に賛成のパーセントが予想外に少なかったことに見られる。賛成率はRBコーブレントおよびトリアーで一四%、RBファルツで一七%、RBライン・ヘッセンで二〇%、RBモンタバウア (旧ヘッセン・ナッサウ) で二五%にすぎなかつた。

(52) ラインラント・ファルツとヘッセンは反目しているし、ザールの経済はむしろ、バーデン・ヴュルテンベルクと結びついているので。

(53) ファルツについてはザールラントとの結合 (NSDAPのガウ、ザールファルツ)、ライン・ヘッセンと共にヘッセンと結びつくなどの可能性もあるが、共にマイン合流点問題を解決できない。バーデン・ヴュルテンベルクとの結合は過大に近くなるのと、シュトウツガルトとの歴史関係がないのが欠点である。従つてバーデン北部およびザールラントとの区域での、大ラインファルツの解決が一つの可能性として存在し得る。

(54) アウトバーンは、北海沿岸から南下するのと (終戦当時はノルトハイム以北未完成) ルーア工業地帯から南東に走るのが、フランクフルトで合流、マンハイムとハイデルベルクの中間を過ぎ、カールスルーエで東に折れ、シュトウツガルトの南からウルムの北を過ぎてバイエルンに入り、ミュンヘン、ザルツブルクに至る。

(55) フランスの占領当時には、パリーストラスブルからシュヴァルツアルトバーンに入つて、フリードリヒスハーフェン、リンダウに至り、オーストリアのブレーゲンツ—インスブルックに至る鉄道路線が重要であつた (Amtliches Kursbuch der D. Bundesbahn)。

(56) 州の首都は、それぞれ大学都市のフライブルクとチュービンゲン。

戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究 大爺

- (57) 欧州最大の自動車企業ダイムラー・ベンツが旅客車製造を北ヴェルテンベルクのシュトゥットガルトで、貨物車製造を北バーデンのマンハイムで行っているのはその一例であろう。またネカー河の可航水路化は二次戦後急速に進み、一九五八年には貨物取扱量年間三九〇万トンを予定するシュトゥットガルト港が開かれたが、これがこの地域の一体化に果す役目は大きい。
- (58) 面積五一〇〇平方キロ、人口一四七万（一九五〇年）。
- (59) 面積一〇一〇〇平方キロ、人口一八万（一九五〇年）。
- (60) 面積九九五〇平方キロ、人口一三四万（一九五〇年）。
- (61) 投票結果は全体では賛成七〇%、南バーデンは反対五四%であつた(Statesman's Year Book 1953)。
- (62) 工業人口は全西ドイツの一七・七%で第二位（一九五七年）、重工業を欠除するが、精密機械および自動車では第一位、機械、電機、繊維産業を特色とする。
- (63) 農家戸数は連邦内第二位、小経営多く、平均八・〇ヘクタール、果樹はその特産の一。
- (64) 農村人口密度が大きくなく、しかも極めて大規模な重工業が成立したライン・ヴェストファーレンでは労働者は遠隔の地点から移住するものが多く、工業都市内に閉鎖的に居住している。バーデン・ヴェルテンベルクは農村人口密度高く、工業は手工業的熟練を要するものが多く、農村から通勤工が多いのが対照的特色となつている。
- (65) ホーエンローエは、しかし、ヴェルテンベルク領としての長い歴史と、最近のシュトゥットガルト周辺の著しい工業化によつて労力的にこれと結びつきを高め、シュヴァーベン化の傾向を強くしている。
- (66) 南部バーデンのフライブルクを中心とするブライスガウ地区は長くオーストリアの飛地であつたので、独特のまとまりを持つた一生活圏を作っている。
- (67) ビスマルク時代のクルトウーアカンフはその一つの現われである。ヴァイマル共和国では分離的傾向のバイエルン党を持ち、二次戦後もこの党は復活したが、CSUの進出でその投票は一九四九年国会選挙の二一%から一九五七年の三%に激減した。しかし西ドイツ最大の政党CDUの中でも、バイエルンのみはCSU (Christlich Soziale Union) の形で一応別組織を持ち、いわゆるライン派とドーナウ派の分立が存在する。
- (68) オーバーバイエルンの南部は酪農地帯であり、ニーダーバイエルンのドーナウ沿岸は大経営のある小麦生産の中心である。
- (69) ニュルンベルクの機械、玩具、鉛筆、エアランゲンの電機製造。

(70) ぶどうが栽培される。

(71) 農業的であるが、アラグスブルクを中心に隆盛な繊維産業を持つ。

(72) ただこの場合、レーゲンスブルクを中心とする地域の所屬は、難しい問題となる (Cf. Dickinson und Obst).

(73) ヴュルツブルクでもミュンヒェンから急行三時間である。ことに現在建設中のフランクフルト―ヴュルツブルク―ニュルンベルクのアウトバーンが既存の (ベルリナー) ホーフィーニュルンベルク―ミュンヒェンの路線と接続し、またハラータウ―レーゲンスブルク線の完成によつてレーゲンスブルクとミュンヒェンが直結される時には、バイエルンは連邦内で最も完成した高速道路網を持つことになる (H. M. S. O. Germany)。

(74) バイエルンの担税力は平均 (五三八 DM) よりも低く、四二九 DM で、ニーダーザクセン (四〇八) をわずかに凌ぐだけである。

(75) ヴュルツブルク、バンベルク、アシャフエンブルク、シュヴァーベン地方などは主に教会領で、バイロイトやアンスバハには封建君主があり、ニュルンベルクをはじめライヒスシュタットも混つていた。

(76) フランスとの経済協力をつづけながら、国際管理下に独立するという立場の政党が一二月の選挙で大敗したので、翌年一〇月フランスと西ドイツの間に、ザールの西ドイツ復帰に関する協定がリュクスンブルで結ばれた。西ドイツはこの協定の一部としてモゼル河を可航化してロレーンの工業地帯の開発を援助することとなった。

(77) オープストの構想、E. Obst: ibid.

(78) ラーベの構想、H. Rabe, (Obst の上記論文参照、Fig. 8)

(79) ショイの構想はこの線であるが、ケルン地域を含まないから、モーゼルの解決というのが妥当かも知れない E. Scheu: Die wirt.-geogr. Gliederung Deutschlands.

(80) バウマンの構想はこれに属する (同じく Obst の上記論文参照、Fig. 8)

附表 I 敗戦によるドイツ領土帰属の現状 (1959 年初頭)

Deutsches Reich (1938) 470544 qkm	Preussen 293842 qkm	Sachsen	14995	→	Deutsche Demokr. Republik. 107427 qkm	
		Thüringen	11763	→		
		Anhalt	2314	→		
		Mecklenbg.	15721	→		
		Sachsen	25529	→	Polen	100663
		Brandenbg.	38275	↘		
		Pommern	38401	↘		
		Schlesien	36696	→		
		Ostpreussen	36992	→	USSR	13886
		Berlin	884	→	4 Mächte ^{481 + 403} (三国) (USSR)	
		Sch.-Hol.	15682	→	Schleswig-Hol.	15680
		Hannover	38705	→	Niedersachsen	47469
		Westfalen	20215	→	Nrh.-Westfalen (RhPf)	33958
		Rheinprov.	24477	↘		
		Hess.-Nass.	16845	↘	Hessen	21108
		Hessen	7691	↘		
		Bayern	76089	↘	Rheinland-Pfalz	19828
		Württemberg.	19508	→	Baden-Württ embg.	35750
		Baden	15070	→		
		Hamburg	746	→	Hamburg	747
		Bremen	258	→	Bremen	404
		Braunschwg.	3672	→	(NdSa)	
		Oldenbg.	5396	→		
		Schaumbg.-Lippe	340	→	(NrhW)	
		Lippe	1215	→		
		Saarland	1924	→	Saarland	2567

戦後の西ドイツにおける人口の国内移動の研究

大爺

筆者作製, 資料は St. Handbuch von Deutschland 1949 および
St. JB. BRD.

附表 II 三国の占領地区とそこの中での新しい州の成立

経済学
研究

一五

イギリス地区

	Hamburg	→	Hamburg
	Prov. Schleswig-Holstein	→	Schleswig-Holstein
Preussen	Prov. Westfalen	→	Nordrhein-Westfalen
	Rheinprovinz の中 RB. Köln, Aachen, Düsseldorf	→	
	Prov. Hannover	→	
	Braunschweig	→	Niedersachsen
	Oldenburg	→	
	Schaumburg-Lippe	→	
	Lippe	→	Nordrhein-Westfalen

アメリカ地区

	Bayern	→	Bayern
Preussen	Prov. Hessen-Nassau	→	Hessen
	Hessen	→	
	Württemberg 北半	→	
	Baden 北半	→	Württemberg-Baden (後に Baden-Württemberg)
	Bremen	→	
Preussen	Prov. Hannover の Stadt Wesermünde	→	Bremen
		→	

フランス地区

	Baden 南半	→	Baden	→	後に Baden- Württemberg
	Württemberg 南半	→	Württemberg -Hohenzollern	→	
	RB. Hohenzollern	→		→	
Preussen	Rheinprovinz の中 RB. Koblenz, Trier	→	Rheinland-Pfalz		
	Prov. Hessen-Nassau の中 4 つの Landkreis	→			
	Hessen ライン左岸の 6 つの Kreis	→			
	Bayern の RB. Pfalz	→			
	Saarland	→	Saarland		